

私を、よく見てくださいますか。極悪人に見えますか。



ひかりごけ

HIKARIGOKE
LUMINOUS MOSS
DIRECTED BY KEI KUMAI

三國連太郎
奥田瑛二
田中邦衛
杉本哲太
津嘉山正種
内藤武敏
井川比佐志
笠智衆

熊井啓監督作品
原作・武田泰淳
新潮文庫刊

製作 内藤武敏・相澤徹
脚本 池田太郎・熊井啓
撮影 橋沢正夫
照明 岩木保夫
美術 木村威夫
音楽 松村植三
録音 紅谷恒一
編集 井上治
助監督 高根美博
プロデューサー 中島逸郎
ディレクター 大場正弘
製作フィルム・クエスト・ネオ・ライフ
配給 ヘルルト・エース・日本ワールド映画

miki

戦後文学最大の衝撃

武田泰淳『ひかりごけ』完全映画化

北海道、知床半島のマツカウシ洞窟内に繁殖する無数の天然記念物「ひかりごけ」に圧倒される2人。地元中学校の校長が、歴史と文化の調査のためこの地を訪れた作家を案内している。そこで校長はこの地方を舞台にして起こったある事件について話し始めた。

敗戦の色も濃くなり始めた時代、昭和18年の暮れ、陸軍の軍需物資を積んだ船団の一隻が座礁、吹雪の激しい荒海を泳ぎ抜け、4人の船員がペキン岬の洞窟に漂着したと言ふ。

そして3か月後、無事生還したのは船長だけだった。厳しい寒さと飢えの中で、彼らにいったい何が起こったのか？

校長の話に導かれるように作家は、洞窟内の極限状態、人

ひかりごけ

熊井啓 監督作品／原作：武田泰淳

新潮文庫刊

間同士の葛藤へと思いを馳せ、構想をたて始めていた……。

昭和29年に発表された武田泰淳の同名小説の映画化である。日本の戦後文学において最も重要な一つであるこの作品は、人々に強い衝撃を与え続け、その問題提起は今なお新鮮である。

武田泰淳は、実際の事件を扱いながら、戦争という大量殺人の問題と個の殺人、さらに飢餓の極限状況に追いつめられた人間が人間の肉を食べる問題、タブーを犯した者とそれを裁く者の資格、日常と非日常の価値転換など、精神の肉ひだにひそむ人格の根源を探っている。この小説は発表されて以来、様々な映画企画が試みられたが、一度も実現されていない。

“人間喜劇”……熊井啓・新たな挑戦

この問題作を、今や世界的な名声を定着させている熊井啓監督が映画化に成功した。

87年に『海と毒薬』でベルリン国際映画祭にて審査員特別賞と2度目の銀熊賞(1度目は『サンダカン八番娼館・望郷』)を受賞。そして89年『千利休・本覺坊遺文』でヴェネチア国際映画祭サンマルコ銀獅子賞、シカゴ国際映画祭最優秀芸術貢献賞受賞と、各国の映画祭で注目を集める熊井監督は、近年、作品的なテーマも社会派的な告発から一線を画し、新たな題材に挑戦している。内外共に一層注目を集めるその彼が次に選んだのが『ひかりごけ』である。実は彼にとつて28年前の監督デビュー時から熱望していた企画でもある。人間の根源を様々な角度から捉え続けてきた熊井監督が、食人という異常状況を媒介にさらに人間に迫る意欲作である。

またこの作品は、「この食人事件の底には、ぎりぎりの状態における人間の行動だけではなく、明日をも知れぬ現代の様々な悲劇も隠されている。その悲劇性を突き抜けた人間喜劇を目指したい」と監督自身語っているように、人間そのものに不可避的につきまとう哀しみ、更には「おかしみ」をも鮮やかに描いている。

強固なスタッフ、そして最高のキャストینگ

熊井監督作品、特に80年代中盤以降の特徴は、映画性とテーマ性が綿密に絡み合った骨太な作品が多いことだ。これは、同一のスタッフを一貫させるといふ、制作体制が大きな要因となっている。今回『ひかりごけ』の撮影・柄沢正夫、照明・岩木保夫、美術・木村威夫、音楽・松村禎三、編集・井上治といったメイン・スタッフは、『海と毒薬』以来熊井組に参加している。スタッフ、監督間の根強い相互信頼の証しと言え、『ひかりごけ』でもその力は見事発揮された。

そして、なによりもこのあまりにもセンセーショナルな題材を実現するには、日本映画界における最高のキャストینگが必要だった。

名優にして怪優という超個性派の三國連太郎は熊井作品、初出演にして一人二役。

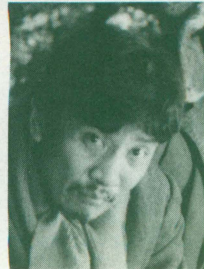
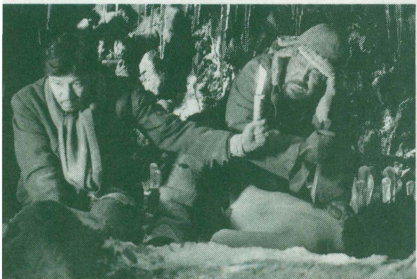
そして、日本映画史の中で神話的な存在になりつつある笠智衆も初出演。W・ヴェンダース監督作品『夢の涯へまでも』に続く出演である。また、演技派として知られ、悲哀感を帯びた熟年俳優として大きな飛躍を遂げている田中邦衛も初挑戦。

さらに、このベテラン勢に対し、熊井作品4作連続出演となる実力派、奥田瑛二は、息の合った演技を勿論こどもも披露する。『海と毒薬』での熊井監督との運命的な出会いにより新境地を開拓、苦悩する人間の迫真の姿を追求し、演技者としての評価も高い。

今回「題材が題材だけに、極度の集中力を要求される演技が続いた」と、奥田自身語っているように、火花を散らす演技合戦が、この最高のキャストイングの間で展開されている。

なおこの作品は日本映画としては5年振りに、第42回ベルリン国際映画祭のコンペティション正式参加作品である。

(上映時間：1時間58分)



G.Wロードショー

特別鑑賞券発売中 ¥1400 [全自由席定員制・入替制]

当日 ¥1700均一の処(税込)

※満席および上映中の入場はできません。

シネマスクエア
とうきゅう

新宿歌舞伎町ミラノ座横3F (3232) 9274

連日 11:30 2:00 4:30 7:00

●毎金・土曜はレイトショー実施 PM9:30

